

【論文】

芸術・文化活動を媒介とした汎ラティーノ連合の試み
—サンフランシスコ・ミッション地区の事例から—

丸山悦子*

An Attempt of Latino Unity through Arts and Cultural Activities:
A Case Study at Mission District, San Francisco

MARUYAMA, Etsuko

要旨：多様な人種・民族集団が居住するサンフランシスコ・ミッション地区を事例に、ラティーノ住民が用いた汎ラティーノ連合の戦略を考察する。具体的には同地区で中南米系芸術家が立ち上げた団体の活動の歴史を概観し、音楽や舞踊の文化・芸術活動等を通じて、同地区におけるラティーノの存在感を示し、また地域活性化を試みる事例を描写する。それらを通して、公的な地理空間をアイデンティティの拠り所とする活動と汎エスニック・アイデンティティの相関性を考察する。

キーワード：汎ラティーノ・アイデンティティ 芸術文化 コミュニティ
ミッション地区 サンフランシスコ

1. はじめに

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は、アメリカ合衆国の人種・エスニック集団にも大きな影響を及ぼした。なかでもアフリカ系や中南米系（以下、ラティーノ）などの非白人マイノリティは、国内で停滞した経済活動の余波を大いに被ることとなった。特にラティーノは飲食や清掃業などのサービス産業に従事する者の割合が高い。これらの業種に加え、レ

*まるやま えつこ 文教大学文学部英米語英米文学科・非常勤講師

ストランや宿泊施設などもパンデミックの拡大で打撃をうけており、その結果ラティーノ住民の失業率は他の人種グループより高水準となった。米国労働局の統計によれば、新型コロナウイルスのパンデミック以前である2020年1月の失業率は白人が3%、アフリカ系は6.1%、アジア系3.1%、ラティーノは4.3%であった。アフリカ系と比べるとラティーノの失業率は低かったが、同年12月になると新型コロナウイルスの感染拡大で雇用状況は悪化した。白人の失業率は6%となり、アフリカ系は9.9%、アジア系は5.9%と上昇したのに対し、ラティーノは9.3%と全ての人種グループのなかで最も失業率の悪化が顕著だった (U.S. Bureau of Labor, 2021; Zamarripa & Roque, 2021)。このような人口動態を見ると、マイノリティの失業率改善は米国経済の立ち直りを左右するという想定から、経済指標と引き合わせてラティーノ人口を分析する論考が多く見られる (Furuseth, 2010; Kasarda and Johnson, Jr., 2006)。他方で、ラティーノは教育機会の不平等や不当な警察権力の行使など、二級市民的な待遇に抵抗し差別是正を訴える運動を展開してきたことは、中南米系による学術研究を除き、あまり注目されてこなかった。本稿ではラティーノが芸術という媒体をツールとして、居住地域の活性化や青少年育成プログラムを効果的に活用してきた事例に注目する。中南米系以外にも多様な人種・民族集団が居住するエスニック・コミュニティで、ラティーノが目的達成のために用いた戦略を概観することで、汎ラティーノ・アイデンティティ実在性を検証する。

1-1. ラティーノの概要

ラティーノとは「ヒスパニック」の同義語として用いられてきた文化的属性を示す言葉で、米国在住のスペイン語話者、またスペインやラテンアメリカの文化背景をもつ人びとを指す。スペイン語は現在アメリカで人びとが家庭で話す最も多い外国語であり、他の言語よりはるかに高い使用比率である¹⁾。10年毎に実施される合衆国国勢調査(センサス)でも、スペイン語を母語とするラティーノは着実な人口増を遂げており、ラティーノは

現在白人に次ぐ最大のエスニック集団となっている。2020年センサスによると、白人（ラティーノと申告した人を除く）は1億9170万人余りであり単独で最大の人種集団であるが、総人口に占める割合は減少の一途をたどっている。一方、ラティーノは前回より23%増えて6210万人となっている。アフリカ系（3994万人）の1.5倍、アジア系の3倍の数である（U.S. Census Bureau, 2021; 日本経済新聞2021年8月14日）。

一口にラティーノといっても、住民の背景は多岐に渡る。出自国においてはセンサス局が示す「ラティーノ／ヒスパニック」の定義だけでも、中米・南米の代表的な国だけで19か国を含む（U.S. Census Bureau, 2022）。出自国の幅広さに加え、ラティーノを構成するグループは人口比率の点でも多様である。全国的に最大多数を占めるのは61%のメキシコ系であるが（U.S. Census Bureau, American Community Survey, 2019 a）、州によりその構成は大きく異なっており、地域差が大きい。例えば合衆国西部では、メキシコ系が圧倒的な多数派グループである。2019年のデータによると、カリフォルニア州ロサンゼルス郡ではラティーノ住民の77%、テキサス州のヒューストン地域では73%がメキシコ系である。一方東部に目を向けると、構成グループは様変わりする。フロリダ州オーランド地域ではラティーノ住民のうちメキシコ系は8%に過ぎず、最大集団はプエルトリコ系（51%）である。同様にフロリダ州マイアミ地域でもメキシコ系は6%にとどまり、数的に支配的なのはキューバ系（42%）である（Pew Research Center, Sep. 16, 2019）。

ラティーノはまた世代や教育水準、所得、出自文化への帰属意識も多様な集団である。両親や祖先の出自国を基に「ラティーノ／ヒスパニック」を自認していても、米国で生まれ育ったためスペイン語より英語を日常語として使用するのを好むラティーノも多い²⁾。

1-2. ラティーノの「人種的」立ち位置

上述のように、現代の米国において人口統計や経済指標の観点からその

動向が注視されるラティーノであるが、人種上は白人ではなく黒人（アフリカ系）でもないともみなされ、連邦政府の曖昧な定義づけに翻弄されてきた。一例として、センサス局は1930年にラティーノの下位集団であるメキシコ系を一つの「人種」と規定している。つまり、白人とも黒人とも区別される集団として当時は連邦政府が認識していたことを示す。しかしその後、ラティーノ住民は国勢調査で課される単純な二項対立の人種選択に躊躇し、自らの「人種」申告に戸惑うようになる。1970年のセンサス調査では、ラティーノ住民の人種申告に「チカーノ」、「ブラウン」、「ララーザ」（筆者註：la razaとは白人でも黒人でもない人種を示唆する言葉で、特にメキシコ系アメリカ人の間で用いられた）という回答が見られた。しかし、これらの申告は最終的に「白人（ホワイト）」として分類されたという（青柳まちこ2010, 190-191; 青柳編2004, 282）。

上述のような紆余曲折を経て、現在センサス局の定義では「ヒスパニック／ラティーノ」は人種とは異なる（強調筆者）と説明されている。つまり、同住民の人口統計はセンサスの人種内訳には含まれず、「ヒスパニックまたはラティーノ」という別項目としてカウントされる。この複雑かつ分かりづらいセンサスの扱いは、ラティーノ住民が一括りの人種集団でなく、あらゆる人種背景をもつ人たちから構成されているためである。このように連邦政府による流動的な人種分類は、ラティーノの約三分の一が白人でも黒人でもない「その他の人種」をセンサスで自己申告することにつながっている。2019年度の調査では、ラティーノの約28%が「その他の人種(Some other race)」を選択している(U.S. Census Bureau, American Community Survey, 2019 a)。³⁾

1-3. 研究の目的.

上述の経緯を考慮するとき、ラティーノ住民が独自のエスニック・アイデンティティまたは人種アイデンティティを確立したいという欲求を抱くことは容易に想像できる。一例として1960年代、南西部のメキシコ系ア

アメリカ人は「チカノ」という呼称を選ぶようになるが、それは「非アングロ (=非白人)」という人種アイデンティティの確立の表明であった(ゴンサレス 2003, 356)。チカノとは元々メキシコ系の農業労働者を侮蔑的に指す呼称であったが、肯定的な「人種」アイデンティティとして、肌の色に関係なく、メキシコ系の間で用いられるようになったのが「チカノ」である。チカノを自称するのは米国で白人を頂点とする既存の社会・政治制度に懐疑的であり、職業や階級、教育、母語に起因するメキシコ系への差別を不服とする人びとである。二級市民的待遇を「人種」差別だとして、教育機会の不平等や不当な警察権力の行使といった差別是正を訴えるアクティヴィズムは、チカノ運動として全米各地で展開された。ニューヨークやシカゴではプエルトリコ系が運動の担い手となり、近隣住民に福祉プログラムを提供したり、青少年を組織した積極的なコミュニティ活性化を展開したりした。

しかし、1960年代から1970年代の公民権運動期を経たあと、中南米系を扱う学術研究ではラティーノ下位グループの差異を認識しながらも、より広汎な集団的アイデンティティを検証するものが多くみられるようになっていく。米国で中南米系人口が1980年代に急拡大すると、国政や地方選挙におけるラティーノ住民の投票動向が注目を集めるようになった。あたかもスペイン語系住民が一枚岩であり、選挙で同質の投票行動をとるような印象を与える論考が見受けられるようになり、支持政党やスペイン語系候補者への支持率など、ラティーノ有権者の政治意識を分析する研究が盛んになっていった(Padilla, 1985; de la Garza et al., 1992; Barreto, 2012)。本来グループ間に内在する出身国や母国の歴史・文化的慣習の違いをいったん留保し、「ラティーノ」という集団的アイデンティティを採択することは、政治的利益(political interests)を得るための米国社会の常套手段として、中南米系エリート層が選択的に用い始めたのがラティーノ・アイデンティティである。それはラティーノ中流階級が主導した意図的な属性の構築であったのと同時に、人種化された「他者」としてラティーノが被ってきた

差別や偏見への反動であったといえる (Beltrán 2010, 6-7)。加えて、ラティーノ・アイデンティティとは組織化されたコミュニティで喚起される、社会的な構築物であると定義されてきた (Padilla 1984, 651-655)。特定の目的や利害の達成のために動員されるアイデンティティであり、よってラティーノ・アイデンティティは固定的かつ不変の意識ではなく、時代や外的環境次第で変容する帰属意識といえることができる。

本稿では汎ラティーノ・アイデンティティの恣意性と可変性を検証する目的から、サンフランシスコ市中心街にあるミッション地区を事例として取り上げる。そこに暮らすラティーノ住民が展開してきた住民運動の歴史を概観することで、白人が主導権を支配する米国社会においてラティーノが「コミュニティ」、つまり居場所をどう勝ち取るかに主眼を置いてきたを示すことが一つの目的である (Oboler 1995, 70-71)。二番目の目的として、祝祭や祭り、文化芸術活動がラティーノ住民のエスニック・アイデンティティに与える影響の検証である。ここではフロレスとベンメイヤーが提示する cultural citizenship の概念が、ラティーノのアイデンティティ形成を考察するうえで一つの有効な理論的枠組みであると考えられる。両著者は cultural citizenship とはラティーノが独自の社会空間を立ち上げようとする社会的実践のことでありと説明している (Flores with Benmayor 1997, 1)。ラティーノなど各エスニック集団が固有の文化アイデンティティを顕示する場として、ある社会空間を自分たちの権利として主張し、ある場所を介在することで人びとの間で繋がりが維持され、近隣の連帯感が生まれ、さらに文化的・エスニックなアイデンティティが強化されるという仮説である (Gómez-Barris and Irázabal 2009, 344-345)。本稿で取り上げるミッション地区では中南米系芸術家が立ち上げた Casa Hiapana de Bella Arts や、ミッション地区ラティーノ芸術文化センター (以下、ラティーノ芸術文化センター) といった芸術に特化した団体の活動の歴史がある。それらが音楽や舞踊といった文化・芸術活動を通じて実践する地域活性化の試みを概観し、上述の理論—公的空間の所有とエスニック・アイデンティティの相関性—

を検証する。

2-1. ミッション地区の概要

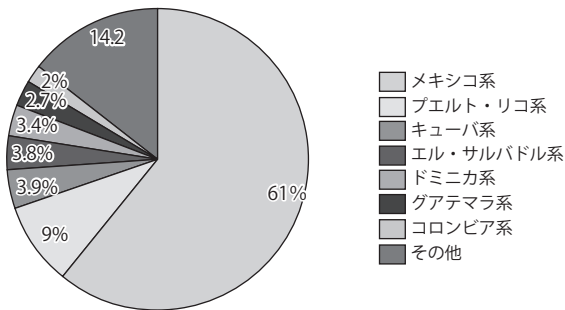
サンフランシスコのミッション地区は中南米系住民の集住地域として知られてきたが、同じカリフォルニア州でも南部のロサンゼルスと比べると、サンフランシスコ都市圏はラティーノ住民の構成に特徴がある。ロサンゼルス郡では住民の約半数をラティーノ人口が占めており、とりわけメキシコ系の比重が突出して高い。ロサンゼルス市および同郡では、ラティーノ住民のうちそれぞれ67%と76%という圧倒的多数がメキシコ系である (U.S. Census Bureau, American Community Survey, 2015)。これに対し、サンフランシスコ都市圏のラティーノの場合、メキシコ系が占める割合は51%に留まっていて、第2集団のエル・サルバドル系が13%と続いている。これらの数値が示すように、サンフランシスコ地域ではラティーノは絶対的優勢のグループで構成されておらず、数的に各グループが均衡を保つような人口バランスでコミュニティが形成されている。つまり同地域のラティーノは各グループの独自性を顕在化させるよりも、グループ間の差異を意識させない方向で連帯感を醸成し、ラティーノ住民への差別や偏見に対抗する政治力を保とうとしている。そのような意識の根幹にあるのは、「排除された経験」に根差すラティーノの人種意識であるといえる (Oboler 1995, 70-71)。

ミッション地区はサンフランシスコ中心部にある同市庁舎からほど近い一角にあり、4キロ平方メートルに満たないエリアである。周囲にはジャパタウンやカストロ・ストリートなど、マイノリティの文化や遺産を発信する施設や米国有数の美術館、大手プロチームの球場など観光名所が立ち並ぶ。地区内にはBART (Bay Area Rapid Transit) という市の高速鉄道が走り、2つの駅が配置されている。その利便性から、市中心街のオフィスでIT企業に勤務する人の需要が高まり、近年地価が高騰している。

同地区には中低所得層のラティーノが多く居住してきた歴史がある。20

世紀初頭から多様な出身国のラティーノがコミュニティを形成してきたが、住民はスペイン語文化に根差した民族的アイデンティティと、低所得労働者という階級アイデンティティをもち合わせてきた(有賀 2019)。現在の住民構成を2019年の統計をもとに概観し、ミッション地区におけるラティーノ人口構成の特徴を把握していく⁴⁾。まず全米人口に照らしたラティーノ住民の数は6048万人で、人口比は18.4%であった。内訳はメキシコ系がもっとも多く、3718万人(61%)である。次に多いのはプエルト・リコ系で582万人(9%)、その後キューバ系が238万人(3.9%)、以下エル・サルバドル系(3.8%)、ドミニカ系209万人(3.4%)、グアテマラ系(2.7%)と続いている(括弧の数値は各グループがラティーノ人口内で占める割合)。このように全米ではメキシコ系がラティーノ人口の6割を占め、圧倒的多数の下位集団だとわかる。2位のプエルト・リコ系はメキシコ系人口の6分の1にも満たない(U.S. Census Bureau, American Community Survey, 2019c)。

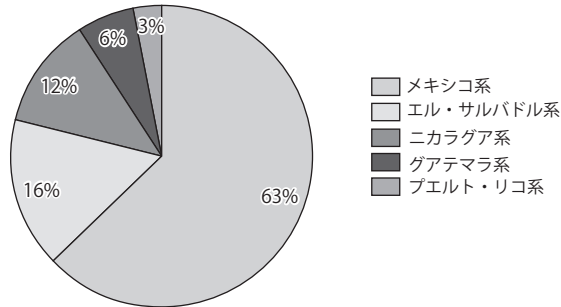
表1 全米ラティーノ人口の内訳(2019年)
American Community Survey(2019c)より筆者作成



一方、ミッション地区におけるラティーノ人口構成は独自の特徴をもつ。最大集団はやはりメキシコ系(13,122人)であるが、第2位のエル・サルバドル系は3,388人である。ラティーノ内で両者の人口割合はそれぞれ54%と13.9%で、全米の数値と比べるとメキシコ系と他の下位集団の比率が狭まっている。第3位のニカラグア系も2,534人(10.4%)で、2位集団と人口

比で大差はない。つまりミッション地区ではメキシコ系が主流ながらも、その他中米を出自とする人びとが一定数居住しているため、メキシコ系が同地区のラティーノ住民の間で圧倒的な支配力をもつには至っていない。このことが後述する同地区で展開された住民運動の形態や歴史に影響を与えている。

表2 ミッション地区ラティーノ人口の内訳
American Community Survey(DP05)より筆者作成



2-2. ミッション地区の歴史

20世紀初頭のサンフランシスコは西海岸で最大の都市であり、捕鯨や海運業、漁業、金融業で活気づく国際貿易都市であった。サンフランシスコ湾に面した市主要部の北東は現在、フィッシャーマンズワーフやピア39、コイトタワーといった観光名所がひしめく地域となっているが、第二次世界大戦前までLatin Quarterと呼ばれ、多様な移民や民族集団が居住するエスニック・エンクレイヴが存在していた。サンフランシスコ湾を望む埠頭からは、フランスやイタリアから多くの移民がやってきた。とりわけイタリア人移民はリトル・イタリアと呼ばれる集住区を形成するほど、人口の規模は顕著であった⁵⁾。さらにアイルランド、フランス、ドイツ人移民などが混在し、コミュニティを形成していた(Sandoval Jr., 120-121; Federal Writers Project of the Works Progress Administration 2011, 238)。ヨーロッパ系移民に加え、メキシコやチリ、ペルーといったラテンアメリカからの

移民も少なからず居住しており、これらの移民がやがて近隣のミッション地区へ移動していくのである。

1950年代から1960年代のサンフランシスコは、多種多様な人びとを惹きつける居住地であり、ビート文化などに代表される革新的芸術運動の発信地であった。市内にはSan Francisco Art Institute、California College of the Artsなど高名な芸術専門大学がいくつも存在する。そのためサンフランシスコは芸術を志す画家や詩人、音楽家などが参集する中心地となっていた (Cordova 2017, 39-45)。既存の社会規範と一線を画し、反主流文化を創造しようという気風に満ちたサンフランシスコは、エスニック・マイノリティの人びとも惹きつけることとなる。第二次世界大戦時に東部や南部から移住してきたアフリカ系アメリカ人はサンフランシスコで造船業に従事していたが、その中には音楽家もいた。同市を含めオークランドなど、周辺地域でジャズ文化の隆盛に貢献していくのである (Cordova 2017, 33)。サンフランシスコがもつ芸術的・社会的開放性はラティーノも惹きつけた。教育機会やよりよい雇用を求めて全米から、また国境を越えて多くのラティーノが移住してくるようになっていった。サンドバル・ジュニアによると、1970年のサンフランシスコは市人口の12%がスペイン語姓であったという。ミッション地区に限定すると、スペイン語姓をもつ人の割合は1950年の11%から1960年は23%、1970年には45%に達していた (Sandoval Jr. 2013, 122)。

3. ミッション地区におけるアクティビズム

上記のようにミッション地区はいわゆる cultural workers と呼ばれる芸術活動従事者の街として知られるようになるが、同時に住民が主体的に運営する草の根的な地域改善運動の歴史をもっている。例えばサンフランシスコ湾岸地域ではCommunity Service Organization (CSO) や Mexican American Political Association (MAPA) といったメキシコ系アメリカ人を主軸とする公民権団体が活発な活動を展開してきた歴史がある。CSO と MAPA は

ともに学校の人種統合や、住宅に関する人種隔離といったメキシコ系住民が抱える現実的な課題に取り組んできた。こうした活動を通し、サンフランシスコ湾岸地域でスペイン語系住民は13万人以上の有権者登録を達成するなど、ラティーノの政治的発言権は重みをもつようになっていった (Baranski 2019)。

先行研究はエスニック・コミュニティにおいて、知識人や芸術家、また地域のリーダーが居住民の民族文化や言語を用いることで、下位集団の境界を越えた汎アイデンティティの形成に寄与することを指摘している (Sommers 1991, 34)。ソマーズの研究では具体例として、ミッション地区で開催されるようになったラティーノ・フェスティバルを取り上げている。広範囲の様々な中南米諸国に由来する音楽やダンスの披露、食べ物の販売や工芸品の展示といった催しは、ミッション地区の住民に「ラティーノ」という一体感を生み出したとする (Sommers, 1991; Cordova 2017, 67-68)。その連帯感に起因しているのは、ラティーノ・グループ内の差異を縮め、出自国による線引きでなく汎ラティーノという境界線を引くことで、社会の白人支配力に対抗しようとする動機である (Sommers 1991, 38, 46)。

以下の節ではミッション地区を拠点とし、芸術や文化に特化したラティーノ団体の事例を取り上げる。団体が掲げた汎ラティーノという性質、また一つの出身国の枠組みを超えた汎エスニック・アイデンティティの動員がどのような目的のもとに繰り広げられたかを考察する。

3-1. ラティーノ芸術団体とサンフランシスコ市芸術委員会の後援

1966年に結成されたCasa Hispana de Bellas Arts (以下Casa Hispanaと表記)は、ミッション地区を拠点とした多様なバックグラウンドをもつ芸術家によって創設された、中南米系メンバーによる先駆的な文化団体であった。音楽やダンス、詩や演劇といった、さまざまな中南米およびスペインの芸術媒体による活動を念頭に置いていた。実際に創設時の参加メンバーは幅広い芸術志向や政治思想をもっていた。代表を務めたのはグアテマラ

人で詩人であり俳優でもあったアミルカル・ロボスである。他にも同団体はグアテマラやアルゼンチン、エル・サルバドル、チリ、ドミニカ共和国といった広範にわたる出自国のメンバーから成っていた (Cordova 2017, 67, 264)。1960年代という時期にミッション地区では既に、汎ラティーノを謳った連帯が芸術という媒体を通して試みられていたことを示す事例である。

Casa Hispanaの功績として青年層を対象としたワークショップの主催などがあるが、なかでも中南米由来の祝祭を初めて公的にサンフランシスコで開催したことが挙げられる。そのような活動の下支えとなったのは、サンフランシスコ市当局が推進していた芸術委員会 (San Francisco Art Commission、以下SFACと表記)の予算であった。同市は多様性に寛大というサンフランシスコの名声を高め、同時に商業的成功も狙い、オペラハウスの整備や大規模な劇場建設を計画していた。1967年に立ち上げられたSFACはその一翼を担っていたのである (Cordova 2017, 70)。当時SFACの理事長だったスニパー (Martin Snipper)はCasa Hispana誕生と、ミッション地区に創設されるラティーノ芸術文化センターにまつわる興味深い証言を残している。かつて移民のアメリカ化プログラムに従事した経験をもつスニパーだったが、彼の考えによれば公的予算がアメリカ化プログラムとエスニック・グループの文化保護に使われるのは相反することではなかった。彼がCasa Hispanaやラティーノ芸術センター設立のための予算書を執筆したのは、そのような理由からであった (University of California, Berkeley 1979, 11-12)。

スニパーのような市当局の人物から支援を受けられたのは、ミッションのラティーノ住民にとって幸運であった。その結果、ラティーノ・グループの一貫した意向―出自文化への自尊心を芸術活動によって誇示する―を反映した組織や施設が誕生することになる。それは当時活発であったベトナム反戦運動や公民権運動に見られた直接行動やデモンストレーションとは一線を画す、ミッション地区在住ラティーノ独自のエスニック文化称

揚の運動であった。ラティーノ芸術文化センターの創設も幸運な社会状況に恵まれ、実現したものといえる。スニパーによるとSFACの助成金であるNeighborhood Arts Program（以下NAPと表記）から、1967年当時2万5000ドルの予算が用意されていたという。SFACは予算公募の知らせを80もの各種団体に送ったものの、結果として募集に応じたのはミッション地区を拠点とするラティーノ・グループだけであったという（University of California, Berkeley 1979, 5-6）。こうして同地区における中南米系の文化施設の設定や関連団体への支援体制の流れができていくことになる。

3-2. Acción Latina(アクシオン・ラティーナ)

次にミッション地区を拠点として1970年から活動している、非営利団体のAcción Latinaの活動事例を取り上げる。同団体の前身は、サンフランシスコ州立大学で教鞭をとっていたファン・ゴンサレス（Juan Gonzalez）が創刊した、スペイン語と英語によるバイリンガル新聞*El Tecolote*の出版を手掛けていた団体である。*El Tecolote*は中南米系が多数を占めるミッション地区はもちろん、隣接するサンフランシスコ湾岸地域に暮らすマイノリティ住民の教育や雇用、生活をめぐる諸課題を取り上げてきた政治色の強い新聞である（Acción Latina ホームページ）。1987年に助成金を受けて現在のAcción Latinaの体制が開始する以前から、汎ラティーノと芸術をテーマに掲げるプログラムを精力的に企画していた。1982年にはラテンアメリカの音楽を称揚する文化祭をミッション地区で開催している（ibid.）。

Acción Latinaが発信する声明や機関紙*El Tecolote*の記事からは、ある一貫した姿勢が読み取れる。それはミッション地区で汎ラティーノ・アイデンティティを志向し活動する際には、「連帯は差異を認めてこそ築かれる」という認識が必要だという理念である。出自国の多様性を内包しているからこそ、ラティーノは単純な一枚岩と見なされるべきではない。メキシコ人やエル・サルバドル人、グアテマラ人はそれぞれ違うという主張である（*San Francisco Examiner*, Oct. 19, 2021; Moschitto, 2021）。こうした声明は、

ラティーノを安易に同一視する社会の眼差しに抵抗している。しかしラティーノが単純化されることに警戒心を抱きながら、中南米系の連帯を示唆する汎ラティーノ・アイデンティティを容認することは矛盾をはらんでいる。その非整合性を解消するには「ミッション地区」という場所が不可欠であるという理念が全面的に反映されたのが、サンフランシスコ市の「文化地区プログラム」に同地区が認定されたことであった。

市長の肝煎りで実現した文化地区プログラムは、2018年から開始された新しい政策である。市税から300万ドルが捻出される同プログラムは、市内で高い集中度をもって確認される特定の文化資源・文化遺産をもつ地区を“Cultural District”と認定する。そして、その保持ための活動を展開する団体に対し助成金を支給するというものである (San Francisco Mayor’s Office 2020; State News Service)。このプログラム誕生の記念すべき初年度に認証を獲得したのが、ミッション地区のラティーノ住民で構成される Calle 24であった。Acción Latinaもこの文化地区プログラムの導入に並々ならぬ関心を持ち、認証を推進してきた。文化地区の実現を受け、ミッション地区のラティーノ住民を代表する Calle 24 に対し、市行政官のヒラリー・ロネンはカリフォルニア州の美術協会と連携して今後、当該地域におけるラティーノ的な特質を育てていきたいという声明を出すに至っている (State News Service)。本来私的な空間であるエスニック居住地を公的空間へと変換することを実現した同プログラムは、ミッション地区のラティーノにとり画期的な分岐点となったといえる。

4. 考察

汎アイデンティティを検証する先行研究は、上述したように、ラティーノ有権者を効率的に政治動員できるかという見地から、支持政党や投票行動に強い関心が払われ、分析する傾向が見受けられた。しかしラティーノ・アイデンティティの顕現は選挙や投票時だけでなく、文化的領域—祝祭やイベントの開催による公的空間の占有—や、ラティーノ居住地における公

共施設やモニュメント建設といった社会空間を媒介としても確認することができると考えられる (Gómez-Barris and Irázabal 2009, 346-347; Rosaldo and Flores, 1997; Sommers, 1991; Diaz, 2005)。本稿で取り上げたミッション地区の場合、居住する住民が出自国の境界を越え、中南米系という包括的アイデンティティを戦略的に用いてきた歴史が明らかになった。ラティーノ・コミュニティに内在する諸課題を解決するため、白人が支配的な主流社会に対抗して公的援助を獲得するには、芸術という中立的な文化資源をツールとして積極的に活用していくことを選んだといえる。

興味深いのは、当初スニパーやミッション地区に関与したコミュニティ・オーガナイザーが想定したのは、エスニック・グループを念頭に置いたプログラムに公的資金を与えるものではなく、中立的な文化活動による地域振興を第一の目的としたプログラムの実行であった (University of California, Berkeley 1979, 7)。つまり、サンフランシスコ市は特定のエスニック・グループを考慮した予算を提供したのではなく、住民のイニシアチブによる中立的な芸術プログラムの後援を想定していた (University of California, Berkeley 1979, 2; 6-7)。だが、近年実現した同市の文化地区認定プログラムは、特定のエスニック・グループを肯定的に「名指し」して公に認証し、その文化活動を市税をもって支援するものである。本来の公的資金とはその性質上、特定のエスニック・バックグラウンドをもたない住民にも還元されるよう用途が考慮されるものであるが、サンフランシスコは特異なケースといえる。本稿で取り上げた Casa Hispana や Acción Latina、また Calle 24 の事例は、ミッション地区でラティーノが共存する他の人種・エスニックグループの住民がいるなかで、自分たちがそこに住み続ける正統性を主張し、外社会に広く喧伝する試みであったといえる。本稿の検証では汎ラティーノ・アイデンティティに訴えた公的空間の主張は、市行政への訴えとしては成功したといえる。だが汎アイデンティティが個人レベルでラティーノ住民に及ぼす説得性とインパクトの点では、今回の考察では明らかにできなかった。汎ラティーノ・アイデンティティの持続性と有効

性については今後の研究課題としていきたい。

引用文献

- 青柳まちこ. (2010). 『国勢調査から考える人種・民族・国籍：オバマはなぜ「黒人」大統領と呼ばれるのか』. 明石書店.
- 青柳まちこ (編). (2004). 『国勢調査の文化人類学：人種・民族分類の比較研究』. 古今書院.
- 有賀隆. (2019). 「民族的・経済的多様性を継承する都市コミュニティとその変容：米国サンフランシスコ市ミッション地区のヒスパニック系住商混在市街地に着目して」. 『都市計画』 68(1), 24-27.
- Baranski, John. (2019). *Housing the City by the Bay: Tenant Activism, Civil Rights, and Class Politics in San Francisco*. Redwood City: Stanford University Press.
- Barreto, Matt A. (2010). *Ethnic Cues: The Role of Shared Ethnicity in Latino Political Participation*. University of Michigan Press.
- Beltrán, Christina. (2010). *The Trouble with Unity: Latino Politics and the Creation of Identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Cordova, Cary. (2017). *The Heart of the Mission: Latino Art and Politics in San Francisco*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- de la Garza, Rodolfo O., Louis DeSipio, F. Chris Garcia, John Garcia, and Angelo Falcon. (1992). *Latino Voices: Mexican, Puerto Rican, and Cuban Perspectives on American Politics*. Boulder: Westview Press.
- Diaz, D.R. (2005). *Barrio Urbanism: Chicanos, Planning, and American Cities*. New York: Routledge.
- Federal Writers Project of the Works Progress Administration. (2011). *San Francisco in the 1930s: The WPA Guide to the City by the Bay*. Berkeley: University of California Press.
- Flores, W. V. with Benmayor R.. (1997). Constructing Cultural Citizenship. Flores, W. V. & Benmayor, R. *Latino Cultural Citizenship: Claiming Identity, Space, and Rights* (pp. 1-23). Boston: Beacon Press.
- Furuseth, O.J. (2010). A New Rural North Carolina: Latino Place-Making and Community Engagement. In G.Halseth, S. Markey, and D. Bruce Eds.) *The Rural Economies: Constructing Rural Place in Global Economics* (pp. 45-58). Cambridge, Mass: Cabi.
- Gómez-Barris, M. & Irázabal, C. (2009). Transnational meaning of La Virgen de Guadalupe: Religiosity, space and culture at Plaza Mexico. *Culture and Religion*, 10(3), 339-357.
- ゴンサレス, マニユエル・G. (2003). 中川正紀訳. 『メキシコ系米国人・移民の歴史』. 明石書店.
- Kasarda, J.D. & Johnson, Jr., J. H. (2006). *The Economic Impact of the Hispanic Population of the State of North Carolina*. Chapel Hill, NC : Frank Hawkins Kenan Institute of Private Enterprise.
- 三宅 (志柿) 禎子. (2004). 「米国の文化多元主義とプエルトリコ人：マイノリティ運動のなかのプエルトリコ人」. 『岩手県立大学社会福祉学部紀要』 7(1), 1-7.

- Moschitto, Eva. (2021, September). Celebrating culture and breaking the myth of the Latinx monolith. *El Tecolote*, 51 (19).
- 日本経済新聞.2021年8月14日.米の白人人口、昨年初の減少.
- Oboler, Suzanne. (1995). *Ethnic Labels, Latino Lives: Identity and the Politics of (Re)Presentation in the United States*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Padilla, Felix M. (1984). On the Nature of Latino Ethnicity. *Social Science Quarterly*, 65(2), 651-664.
- , (1985). *Latino Ethnic Consciousness: The Case of Mexican Americans and Puerto Ricans in Chicago*. Notre Dame, In: University of Notre Dame Press.
- Rosaldo, R. & Flores W. V. Identity, Conflict, and Evolving Latino Communities: Cultural Citizenship in San Jose, California. (1997). Flores, W. V. & Benmayor, R. *Latino Cultural Citizenship: Claiming Identity, Space, and Rights* (pp. 57-96). Boston: Beacon Press.
- Sandoval Jr., T. F. S. (2013). *Latinos at the Golden Gate: Creating Community and Identity in San Francisco*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- San Francisco Examiner*. 2021, October 19. Celebrating SF Latino history across cultures and generations.
- San Francisco Mayor's Office of Housing and Community Development. (2020, October 23). San Francisco Cultural Districts Request for Proposals.
- Sommers, Laurie Kay. (1991). Inventing Latinismo: The Creation of "Hispanic" Panethnicity in the United States. *The Journal of American Folklore*, 104 (411), 32-53.
- States News Service. 2017, July 13. San Francisco communities recognized as part of state-wide cultural district program.
- University of California, Berkeley. Regional Oral History Office. (1979). San Francisco Neighborhood Arts Program. Retrieved April 5, 2022. UCB Library Oral History Center Web site: <https://archive.org/details/sfneighborartpro00riesrich>.

引用URL

- Acción Latina. History. Retrieved February 4, 2022. Acción Latina Website: <http://accionlatina.org/en/history/>.
- Pew Research Center. (2015, March 24). A majority of English-Speaking Hispanics in the U.S. are bilingual. Retrieved February 14,2022. Pew Research Center Web site: <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2015/03/24/a-majority-of-english-speaking-hispanics-in-the-u-s-are-bilingual/#:~:text=About%20six%2Din%2Dten%20U.S.,2013%20National%20Survey%20of%20Latinos>.
- Pew Research Center. (2019, September 16). Latino populations in the U.S. metro areas are more diverse along the East Coast. Retrieved February18,2022. Pew Research Center Web site: <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2019/09/16/key-facts-about-u-s-hispanics/>.
- U.S. Bureau of Labor. (2021, February 5). Employment Situation News Release. Retrieved July 8, 2021. U.S. Bureau of Labor Statistics Web site: https://www.bls.gov/news.release/archives/empisit_02052021.htm.

- U.S. Census Bureau. American Community Survey. (2015). Retrieved March 22, 2022. American Community Survey Web site. <https://data.census.gov/cedsci/table?t=-06%20-%20All%20available%20detailed%20Hispanic%3A400%20-%20Hispanic%20or%20Latino%20%28of%20any%20race%29&g=0500000US06037&tid=ACSDT5YSPT2015.B01003>.
- U.S. Census Bureau. American Community Survey. (2019 a). Hispanic or Latino Origin by Race. Retrieved February 19, 2022. American Community Survey Web site. <https://data.census.gov/cedsci/table?q=Hispanic%20or%20Latino&tid=ACSDT1Y2019.B03002&hidePreview=true>.
- U.S. Census Bureau. American Community Survey. DP05 (2019 b). Retrieved September 11, 2021. American Community Survey Website: <https://data.census.gov/cedsci/table?q=Latino%20population&g=8600000US94110&tid=ACSDP5Y2019.DP05&hidePreview=true>.
- U.S. Census Bureau. American Community Survey. B03001 Hispanic or Latino Origin By Specific Origin (2019 c). Retrieved September 11, 2021. American Community Survey Website: <https://data.census.gov/cedsci/table?q=hispanic%20or%20latino%20&tid=ACSDT1Y2019.B03001&hidePreview=true>.
- U.S. Census Bureau. American Community Survey. S1601 Language Spoken At Home (2019 d). Retrieved August 27, 2021. American Community Survey Website: <https://data.census.gov/cedsci/table?q=&text=language%20spoken%20at%20home&tid=ACSST1Y2019.S1601&hidePreview=true>.
- U.S. Census Bureau. (2022, April 15). About the Hispanic Population and it's Origin. Retrieved March 20, 2022. U.S. Census Web site: <https://www.census.gov/topics/population/hispanic-origin/about.html>.
- U.S. Census Bureau. (August 12, 2021). Race and Ethnicity in the United States: 2010 Census and 2020 Census. Retrieved August 2, 2021. U.S. Census Web site: <https://www.census.gov/library/visualizations/interactive/race-and-ethnicity-in-the-united-state-2010-and-2020-census.html>.
- Zamarripa, R. & Roque L. (2021, March 5). Latinos Face Disproportionate Health and Economic Impacts. Retrieved June 8, 2021. Center for American Progress Web site: https://www.bls.gov/news.release/archives/empisit_02052021.htm.

注

- 1) 2019年の調査では、5歳以上のアメリカ人のうち4100万人余り（総数の13.5%）が家庭でスペイン語を使用すると答えている。次に多い外国語話者として、アジア系言語を話す人は1097万人となっている。このようにスペイン語話者の数的優勢は明らかである（U.S. Census Bureau, American Community Survey, 2019 d）。
- 2) 2013年 Pew Research Center の調査を見ると、米国生まれの世代でスペイン語使用率が低いことが明瞭である。第2世代と第3世代でスペイン語を主言語とする人の割合は5%に過ぎなかった（Pew Research Center, 2015）。
- 3) 加えて、プエルトリコ系の人を抱く人種アイデンティティはその複雑さを示唆している。メキシコ系とは異なり、プエルトリコ系はアフリカ系の身体的特徴をもつ人も多い。音楽やダンスの文化でもアフリカの要素を継承しており、他のラティーノよりアフリカ系の人種アイデンティティを強く意識しているといわれる（三宅（志柿）、2004）。
- 4) 地区の人口構成は合衆国センサス局の American Community Survey（2019年）を参照した。ミッション地区にはほぼ相当する zip code 94110 地域の情報をもとにしている。
- 5) 1930年代、イタリア系はサンフランシスコで最大のエスニック・マイノリティであった。その数は6万人を超えていたという（Federal Writers Project of the Works Progress Administration, 238）。